

◆半紙二行たて書きに臨書して下さい。出品料440円

第五回

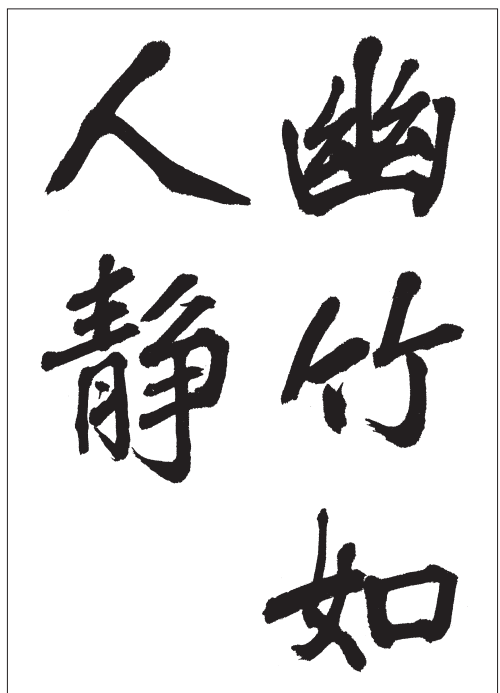
- 1、字句「臨書但有」
- 2、形式「半紙タテ使用。右に「臨書」、左に「但有」と臨書し、左下余白に落款
- 3、概観「詩文と同じ文字が出てきたら変化させよ」とはよく指摘されるところであり、王羲之は「蘭亭序」の中で、「之」二十字を全て変化させていると言われています。「蘭亭序」は一度に書かれた由、意識的に変化させたと思われますが、「十七帖」は手紙の為意識的に変化させることは考えられません。そこで「為」を調べてみました。「為」が十八字でているのが九字、連綿しないのが九字あります。しかし、微妙に異なった筆遣いが見られます。
- 4、各字のポイント
 臨 偏から旁への意連綿は少しズレているように感じるが、偏が狭くなるのを避けたか。
 書 「臨」からの連綿で右端から中央へ、中央から右へ。バランスをとる。
 但 「書」からの連綿で三字連綿となるが(表紙参照)、連綿線というよりも実線の意識か。偏と旁の間を広く取る。
 有 起筆は押さえずスベリ込むように入筆。転折で筆を突き後引き上げる。突いては引き上げ突いては引き上げの運筆。



十七帖・王羲之

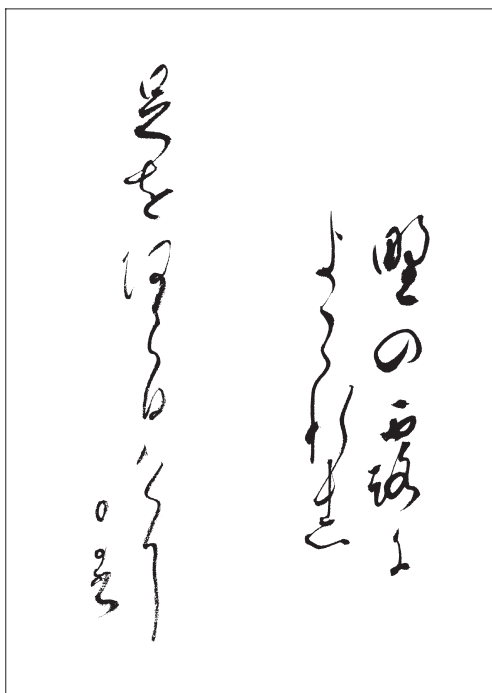
昇試第三部 (漢字・かな) (予告) (九月二十二日締切)

平岡華雪先生書 幽竹人の如く静かに (黎簡)



訳：幽境にある竹は人のようにものしずかである。

平岡華雪先生書 野の露によこれし足を洗ひけり (杉風)



第18回芳香会書展 代表 高橋紫芳

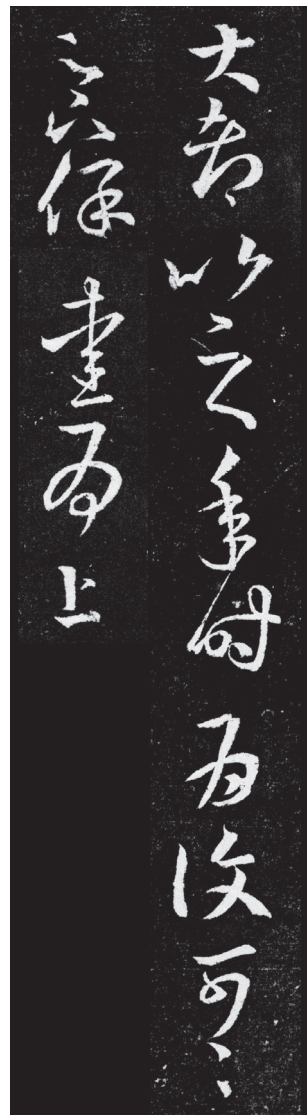
若葉の美しい季節5月29日から6月4日まで、埼玉県民活動総合センターに於いて第18回芳香会書展を、コロナ対策を講じて開催致しました。

書展に向けて錬成会を行うなど努力を重ね作品作りに励みました。初めての試みとして「金子みすゞ詩」を十名にて合作し、テーマ企画は「和風月名」としました。これらの作品は、多くの来場者から感動の声を頂きました。また、展覧会に遠方から足を運んでくれた家族や友人とも会う事ができ、嬉しい一時でした。

ご多用中にも拘わらず、高橋香樹会長先生始め、多くの方々にご来観頂き、会員一同大変励みになりました。発想豊かな紫芳先生の熱いご指導の下、これからも日々精進を重ねて参ります。今後共よろしくお願い申し上げます。
(山岸千翠)



十七帖 (三井本) 王羲之



大都比之年時。爲復可。足下保愛爲上。(爲一は半紙臨書概観を参照)
おおむこれ 大都之を年時に比すれば、復た可々と爲す。足下保愛を上と爲す。
 (現代語訳) それでも、以前にくらべましたら、まあまあよくなった方でしょう。あなたもどうぞご養生専一にお過ごしくださいませよう、お祈りいたします。

※随意部参考(半紙・条幅)としてもご利用下さい。抜粋可。
 条幅部は一枚目無料、二枚目から五五〇円。
 バーコード券に「条臨」とご記入下さい。名簿は条幅部で「(臨)」と表示されます。

一字書 (八月二十二日締切)

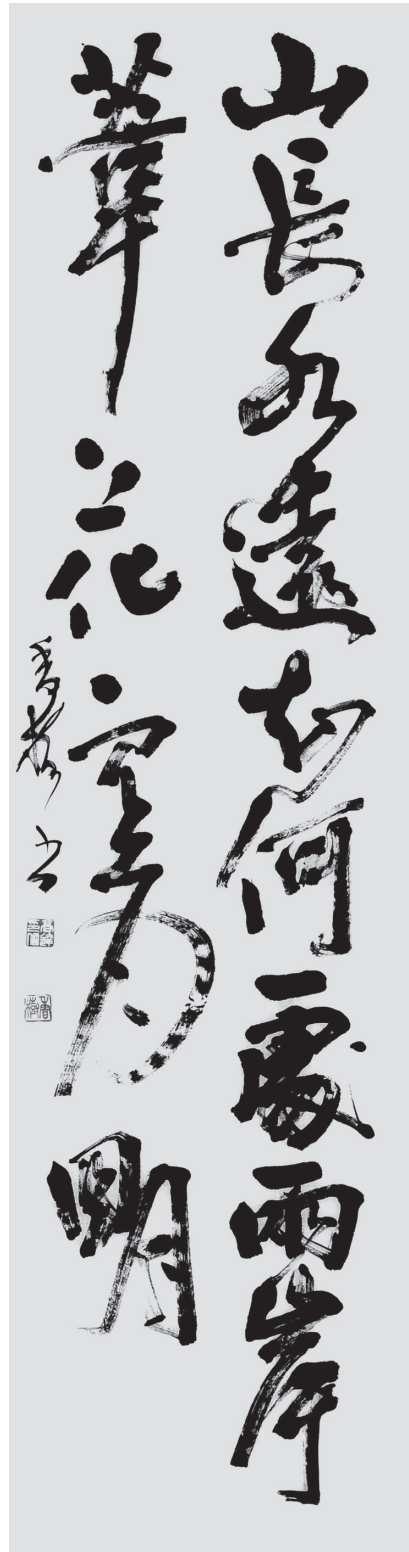
課題

僕

- (1) 書体自由
 - (2) 半紙タテ ※ヨコは中止
 - (3) 落款は余白に調和を工夫し書き入れる
 - (4) 出品料 四四〇円
 - (5) バーコード券貼付 太枠内の臨昇の隣の空欄に
- 一字と記入 段級は無記入

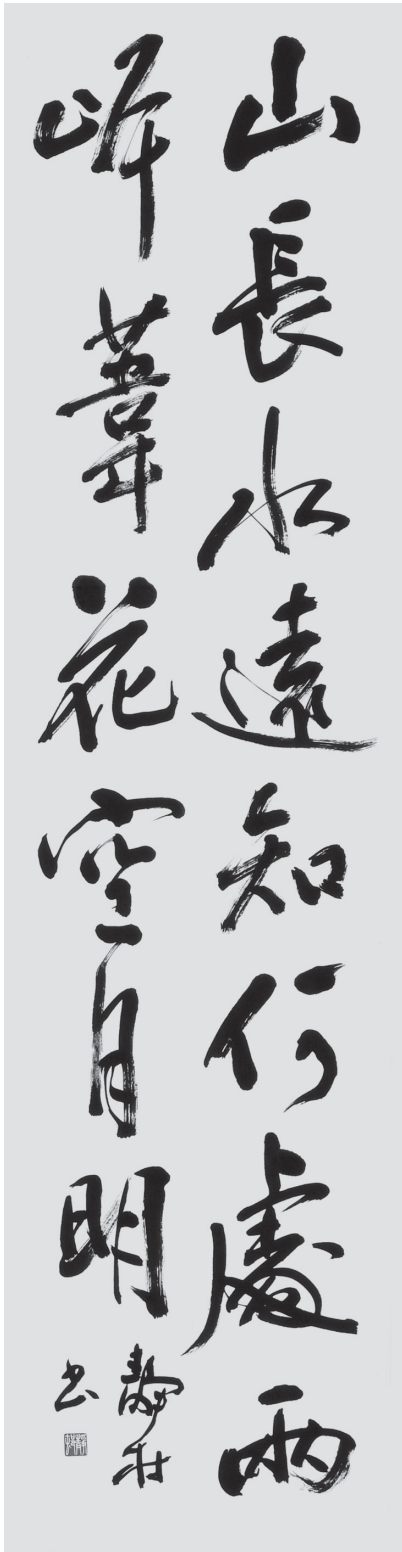
A
高橋香樹会長書

山長水遠知何處 兩岸葦花空月明 (釋英)
山長く水遠く知る何の処ぞ、兩岸の葦花月明に空し。



B
鈴木静村先生書

漢字は左上から始まり、右下で終わるものが多いと前にも書きましたが、これを連綿すれば、右から左へとの連綿となり、連綿線も長くなり単調な連綿となる。今回は、この連綿を止め、上の字は終筆で左に払い、下の字は中央に近いところから始筆することで、連綿線を短くするように試みた。墨継ぎは、「處」と「花」。



従来通り単体を主とした作。落款二行書き。押印で引き締め。左余白書き入れも可。山 一画目縦長。長 一画目突き抜け、五画目左にずらす。安定の形。遠 之繞のびやか。處 左払いを末画に書いたもの (三、四画目の筆順も可)。兩 蘇軾を拝借。空月明 空 月を連綿。月 縦長で細線。
訳：山は長々と水は遠く、どこまで続くか知れないが、兩岸の葦の花は空しく月明かりの中に。

予告 昇試第一部漢字 (九月二十二日締切)

残星幾點雁橫塞

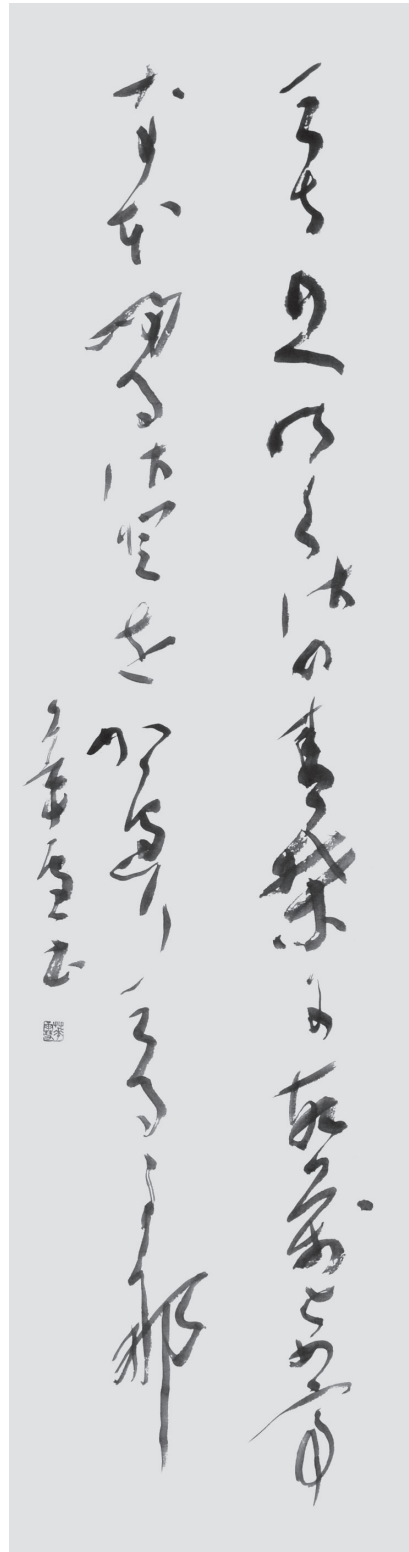
長笛一聲人倚樓 (超撮)

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条漢を○で囲み (1) と記入する。)
 - ・二枚目からの出品 (バーコード券の条漢を○で囲み () に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

A

平岡華雪先生書

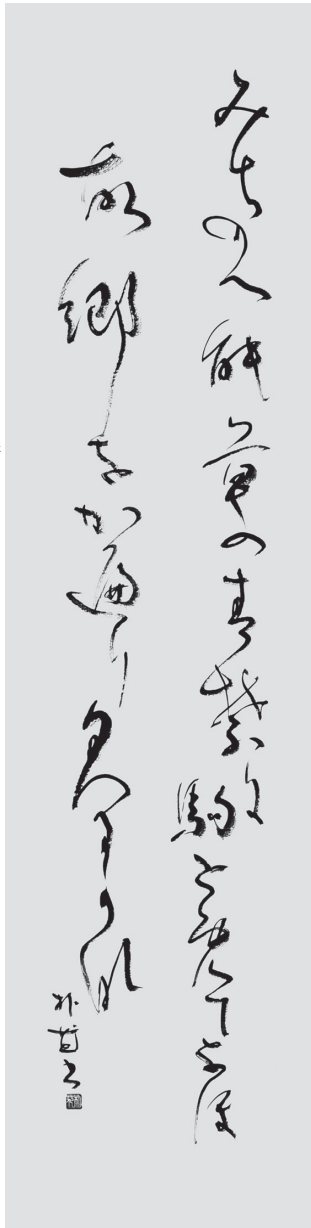
道のべの草の青葉に駒とめてなを(ほ)故郷をかへりみるかな(新古今和歌集 民部卿成範)
三ちのへ能久佐の青葉尔故萬とめ亭な本婦る佐登をか邊り三る可那



B

向山朴花先生書

みちの部能草の青葉尔駒とめてなほ故郷をか廻り見る可那



学び方

歌意：道のほとりの草の青葉を食ませようと馬をとめて、それを口実に、懐かしい故郷の方を再び振り返ってみるのだ。
今回の散らし書きは、一行目、下部を左に外し添わせた形をとりました。左行は、作者の心情をアピールしたいと思いい、一行を使って伸びやかな線でゆったり書きました。
原歌の漢字を生かし、流れと変化を出す為の変体仮名も使うと、漢字の集中部分が堅く、繁雑になります。その流れを柔軟にする為に、文字の「切れ」のよいところで、紙から筆を離し、そこから次字へと連続する。或は「気脈」といわれる見えない線で繋げることを意識してみました。
今回も創作にあたり、どんな字形をとるか、どこに散らし位置をきめるか、言い尽くされた基本に立ち返り、迷い悩みました。

民部卿成範(藤原成範)
藤原南家、後白河院の近臣通憲の三男。
詞書「あづまの方にまかりける道にてよみ侍ける」とある。成範は乱に連座して下野国(栃木県)に配流。詞書は、それを婉曲に述べている。「平治物語」にも引用され名高い。自家で歌合を催すなど、きわめて和歌を好み、藤原清輔、実定ら多くの歌人と親交があった。

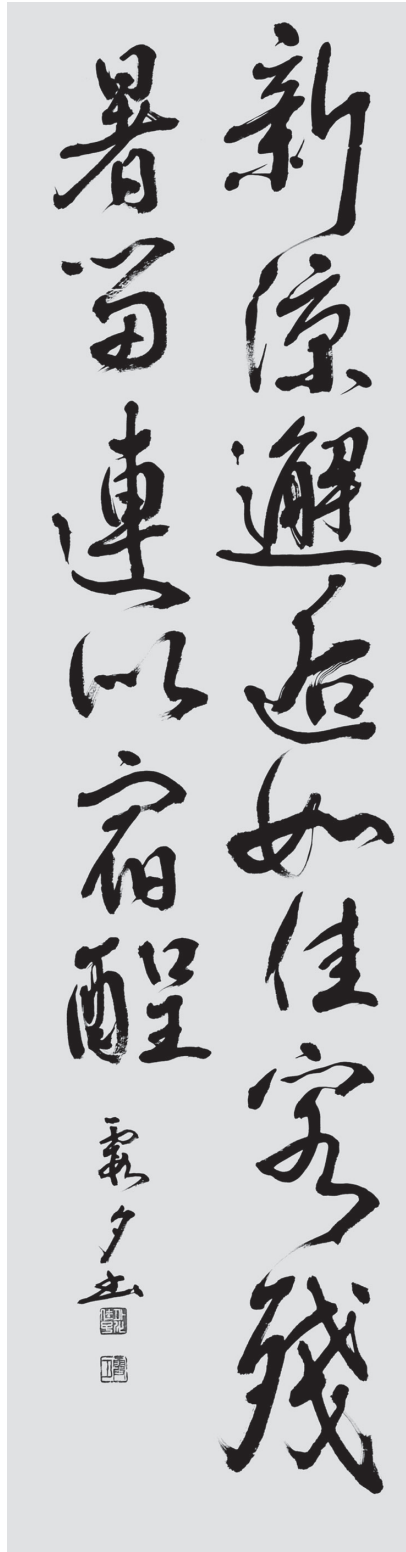
予告 昇試第一部かな(九月二十二日締切)

寝ねぎはにふたたび見むとおもひたるみ空の月は雲がくれにし(土田耕平)

- ◆注意
 - ・条幅部の出品は一人一点(バーコード券の条かを○で囲み(1)と記入する。)
 - ・二枚目からの出品(バーコード券の条かを○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

外川霞夕先生書

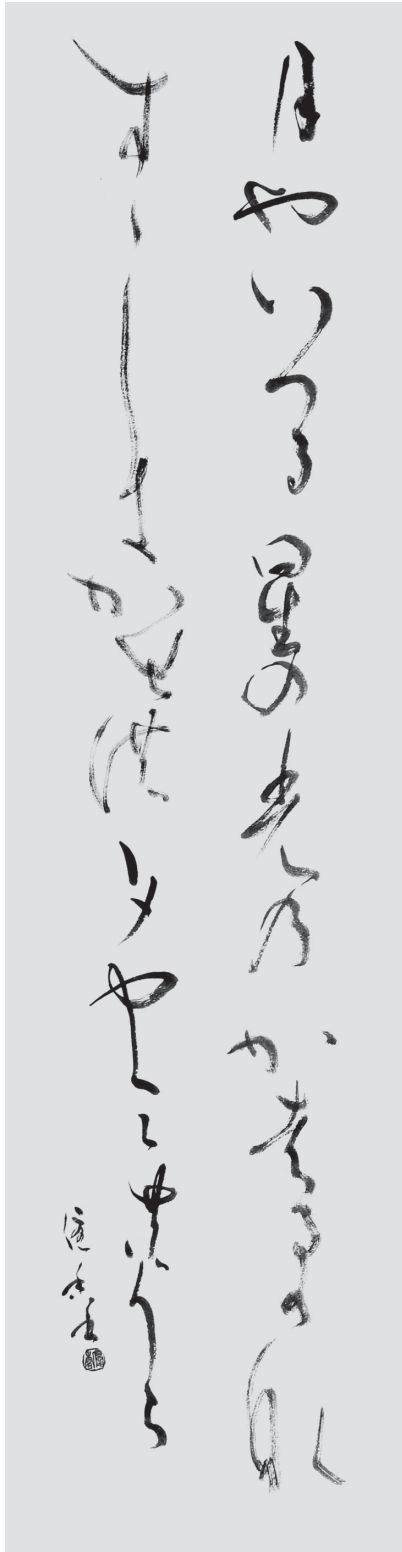
新涼邂逅如佳客。殘暑留連似宿醒（王遵古）
 新涼に邂逅す佳客の如く、殘暑に留連する宿醒に似たり。



訳：初秋の新涼に逢ってはよき客にめぐりあったように嬉しく、残暑の去らぬのは二日酔いのように苦しい。

本澤優香先生書

月やいづる星の光の変わるかな涼しき風の夕やみの空（伏見院）
 月やいづる星の光乃か者る可那すし支かせ濃夕也三農皆ら



- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点（バーコード券の条随を○で囲み（1）と記入する。）
 - ・二枚目からの出品（バーコード券の条随を○で囲み（ ）に何枚目か数字を記入する。出品料550円）

水貝潮華先生書

プラタナス

夜もみどりなる

夏は来ぬ

石田波郷



今月の課題は、初夏の日差しに街路樹のプラタナスの葉が輝き、日が暮れるとその色が映ったように、夜空がみどりに染まった感覚に包まれたという青春句です。カタカナを漢字・平仮名とどのようにマッチさせるのが、この作品のポイントになります。それには「みどりなる」をゆったりと中央に配し書くことにより、カタカナの直線的な表現の中に、柔らかさを添えることができると思います。皆さんも、潤・濁、直・曲線を混ぜ合わせ、初夏の句作品を書いてみて下さい。

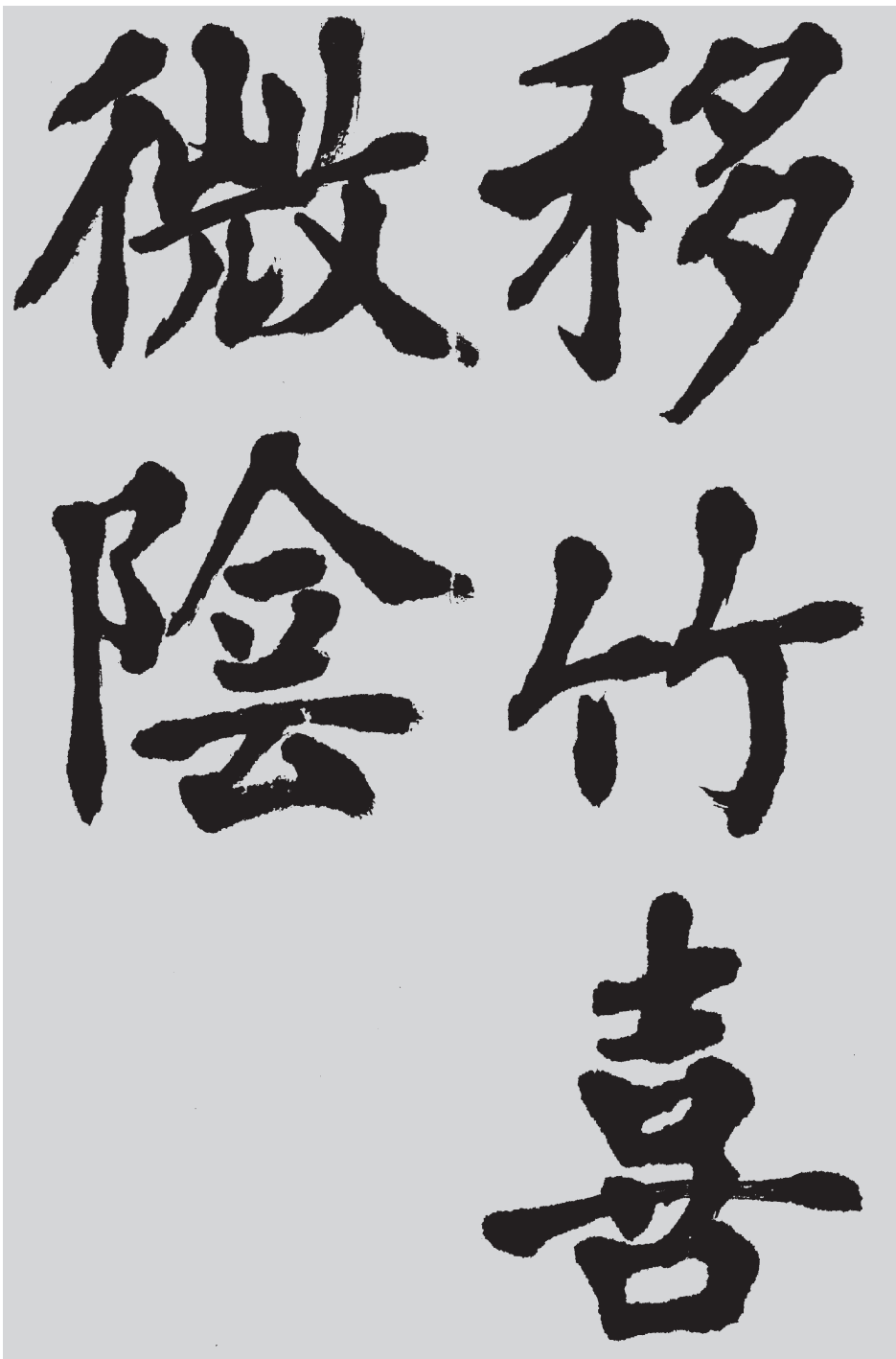
石田波郷（一九一三～一九六九）
松山市生まれ。俳人。五十崎古郷に師事、後に水原秋桜子に師事。昭和五年「馬酔木」に投句、同人、のち編集長となる。同十二年「鶴」創刊・主宰。同二十一年「現代俳句」創刊・編集。中村草田男、加藤楸邨らとともに人間探求派とよばれ、昭和前期俳壇の中心部を形づくった。生涯胸部疾患に苦しむ。句集に『鶴の眼』『病鴉』『惜命』など。

◆注意…はじめて出品される方は私製の紙（3×4 cm位）に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。出品料550円。

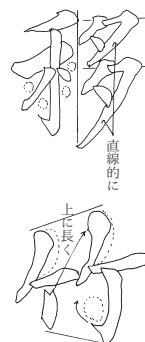
①バーコード券右空欄に漢かと記入 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

平岡華雪先生書

竹を移して微陰を喜ぶ(陸游)
訳：竹を移し植えて、わずかな日かげを楽しむ。



〈落款について〉
落款は筆調は勿論、大きさ、布置も含めてむずかしい。「落款で力が判る」とまでいわれる。落款は、本文を書いたその筆を使うのが適当とされている。改めて、小筆に代えたりすると筆触がちがいで違和感を与え易い。



◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。会員は無料、会員外出品料は460円。

- ①漢字部 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

平岡華雪先生書

虹きえて音楽はなほ続きをり(虚子)

虹きえて音楽はなほ続きをり

虹きえて

音楽は

なほ続きをり

〈墨の表出を 用筆に工夫〉
ひと筆書き作品。この場合、特に左群が単調になり易い。初段階の人には、少しむずかしい部分。ここにどう変化を打ち出すか。要は緩急と抑揚用筆です。上位者はこの表出に挑戦してみてください。墨の表われにポイントをおいて下さい。

予告 昇試第二部かな(九月二十二日締切)

暮れわたる小野のかやはら虫の音をわけむほかには道なかりけり

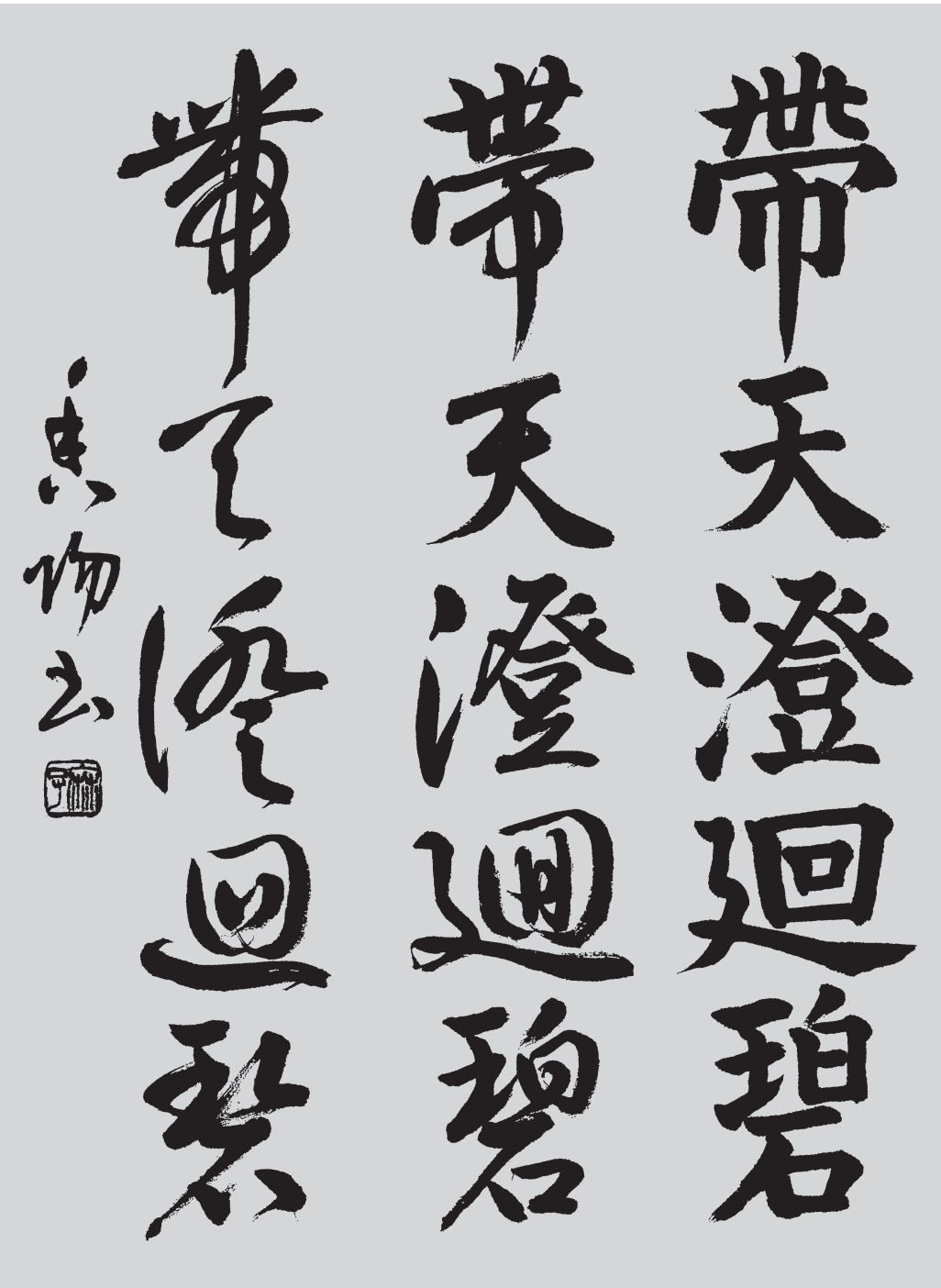
◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。会員は無料、会員外出品料は460円。

①かな部 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

福田 香陽 先生 書

帶天澄廻碧（陰鏗）
天を帯びて廻碧澄み、

訳：紺碧に澄んだ水は遠く天空にまじわり、



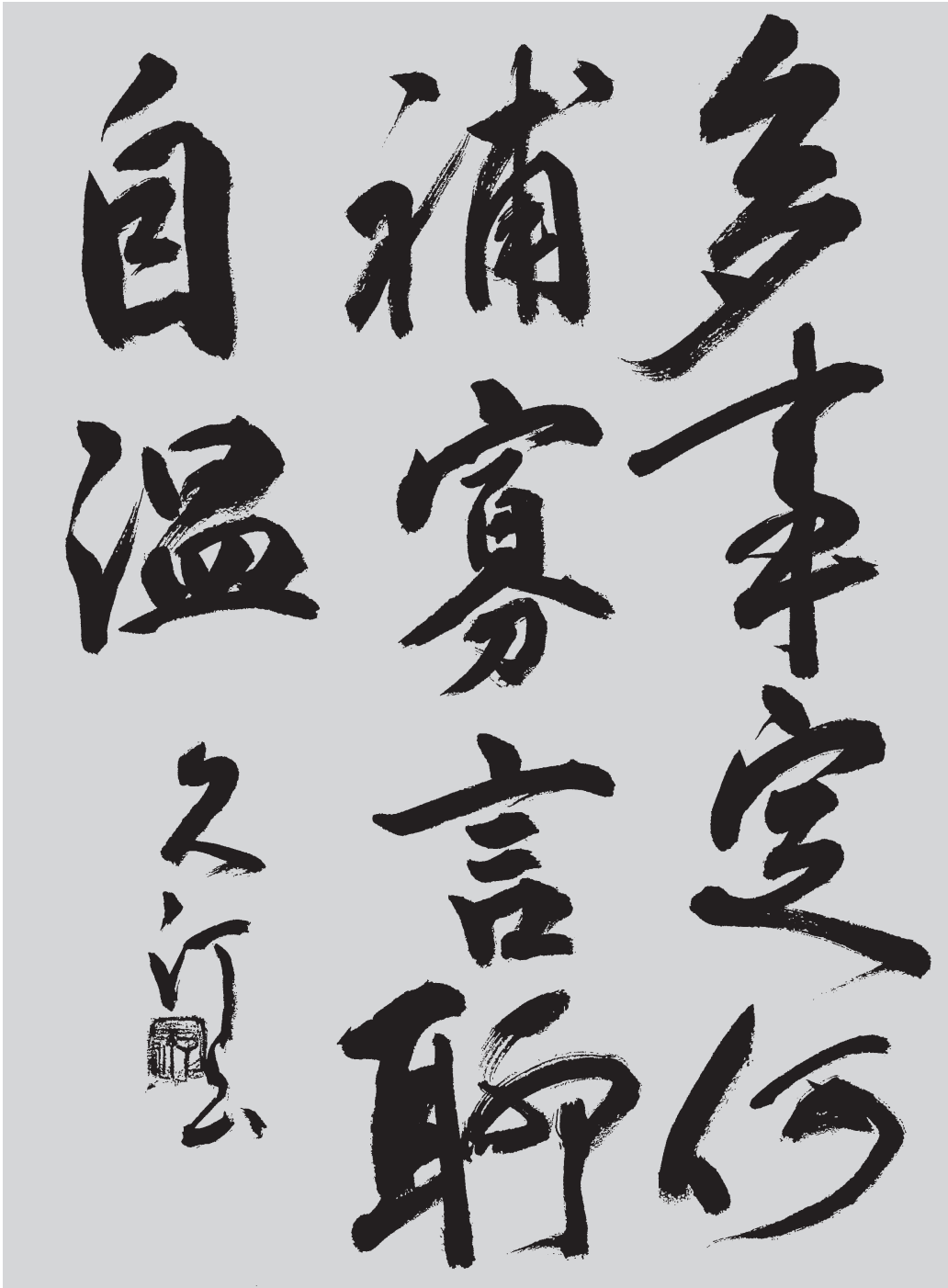
予告 昇試第二部漢字（九月二十二日締切）

行舟逗遠樹（陰鏗）

1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は460円。

笹崎久汀先生書

多事定何補 寡言聊自温 (唐子西)
多事定めて何をか補う 寡言聊か自ら温ぬ。

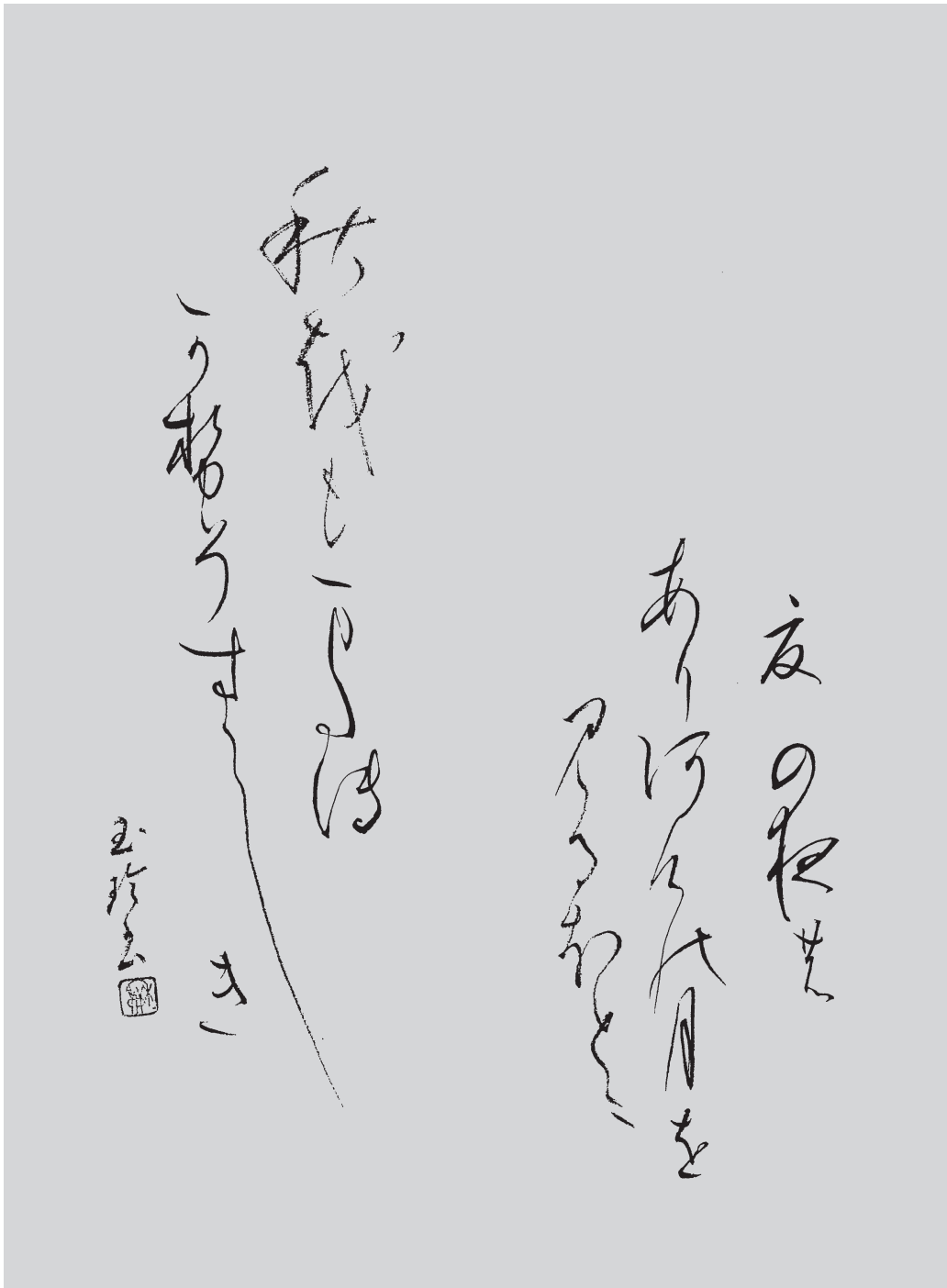


訳：事多くして足すこともない、多く言わずしていささかみずから理をたずねる。

1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は460円

大和田玉玲先生書

夏の夜の有明の月を見るほどに秋をもまたで風ぞ涼しき（藤原師通）
夏の夜あり阿介能月を見る本と二秋越も万多傳可勢そすしき



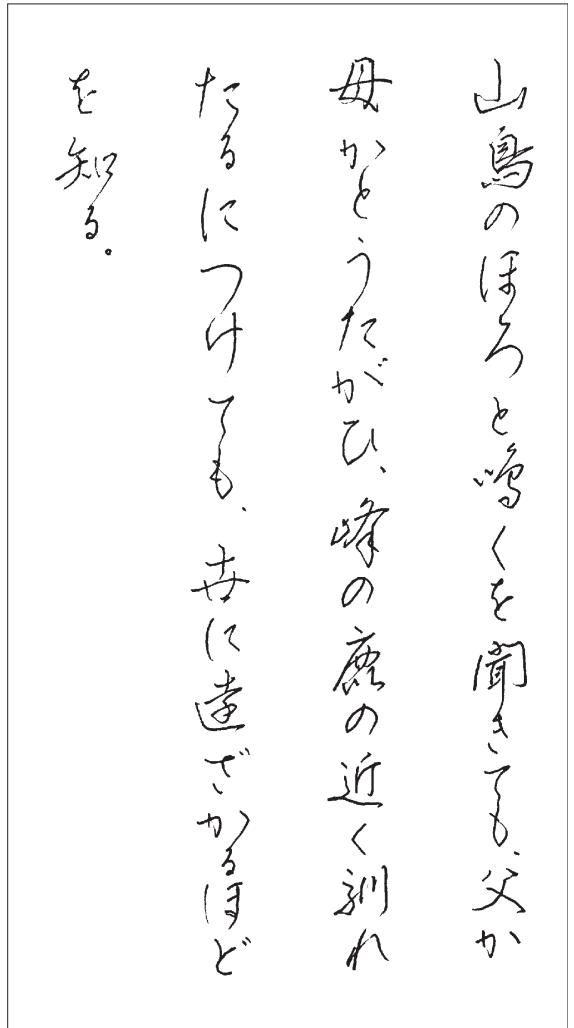
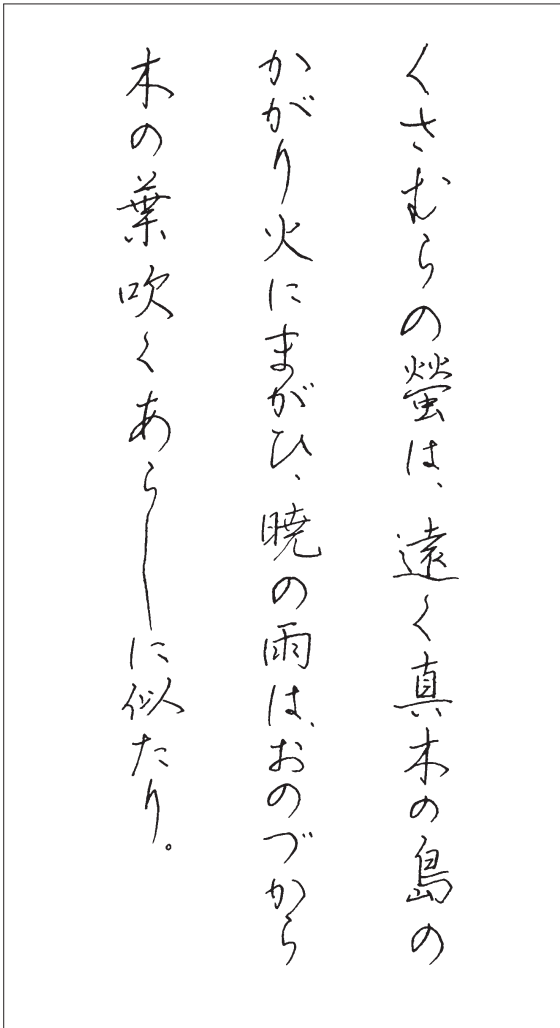
1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は460円

湯澤春翠先生書

川上香蓉先生書

課題 2 (初段階以下)

課題 1 (初段階以上)



課題 1 (初段階以上)

山鳥のほろと鳴くを聞きても、父か母かとうたがひ、峰の鹿の近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。

〔方丈記〕鴨長明

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。
- (2) ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (3) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (5) 会員は無料・会員外は四六〇円

課題 2 (初段階以下)

くさむらの螢は、遠く真木の鳥のかがり火にまがひ、暁の雨は、おのづから木の葉吹くあらしに似たり。

〔方丈記〕鴨長明